ることになった」と。

まだ「抑留」ということは考えられなかった。戦闘に参加した部隊は厳重な監視下に置かれ警戒も厳しかったが、非交戦部隊の我々は割合自由であった。貨車はシベリアの森林地帯から地平線の彼方まで大草原、行けども行けども茨の原野を走る。イルクーツクを過ぎノボシビルスクより南下して二十数日後に、砂漠の中の街、ウズベク共和国の首都タシケント郊外に着いた。

【執筆者の紹介】

軍隊経歴　関東軍の航空教育隊出身（一六六一三部隊）

満州公主嶺より奉天を経て入ソ、被抑留者となる。

ブラゴエシチェンスク～タシケント

昭和二十三年七月二十三日、舞鶴港上陸、復員。

（広島県　山田　浩造）

シベリア抑留の思い出

愛媛県　武田　誠一

（旧姓　深井）

八月十七日の夕方、突然停戦ということになり、何がなんだか判らないまま十八日の朝が来た。全員集合して陣地から下り、蟻の行列の如くぞろぞろと歩き出した。まだ日本が連合国に無条件降伏をしていることなど知る由もなかった。勿論天皇陛下の終戦の放送も知らなかった。密江峠を越え下り始めた頃、先頭の部隊の者が両手を上げており、何をしているのかはじめは判らなかっが、自分の番になってはじめてソ連軍との対等の停戦協定ではなく、日本は負けたのだという実感が湧き、残念でたまらなかった。いわゆる武装解除である。

いよいよ捕虜となり、琿春飛行場付近の大豆畑に仮の収容所があり、ここに収容された。収容された人員

は五千人近くいたのではないだろうか。夕暮れ頃、柵の辺りにいた者が放れ馬に驚き立ち上がったため、ソ連軍警戒兵が暴動を起こしたのでないかと勘違いして乱射した。私も本当に驚いた発砲事件であった。仮収容所に一週間程いたが、その後は何事もおこらず、ただ東京ダモイを信じ、ひたすら帰国を待った。

八月二十六日頃、突然他の収容所に移動命令があり、また蟻の行列のように徒歩が始まった。どこに行くのかさっぱり判らない。一日くらい歩いて目的地に着いた。そこは金蒼という所だった。山で傾斜のある収容所であった。先に来た部隊の者もおり、使役等をし、別に作業はしなかった。この収容所は我々の部隊が入所する前に逃亡者があり、警戒監視は厳重であった。

九月十五日頃までいて、五十四作業大隊を編成し、琿春経由ウラジオストック港から船に乗りダモイ（帰国）を信じ金蒼を後にした。琿春を過ぎいよいよソ連領に入る頃、腹の具合が悪くなってきた。便を度々するようになり、隊から遅れると警戒兵が銃の床尾板で胸を押すようにし「ダバイ、スカレー」と言って早く歩けという。私も戦友と別れるのが辛いので早く追いついて一緒に歩く、また便がしたくなる。夜などソ連軍が満州で略奪した物資を運ぶ大きいアメリカ製のトラックが何台もひっきりなしに通るので、その隙を見て便をする、本当に命がけであった。これからどうなるのだろうかと不安になり精神的にも大変に弱った。だが戦友達と別れるのが辛いのと、もう少しでダモイができるとの思いで頑張った。漸く海の見えるポセットに着いた。もう帰れると勇気百倍の気持ちになった。腹の方は依然として具合は悪く、どうも心配していたアメーバ赤痢にかかっていると感じたが、頑張るのみだ。ポセットの丘の上で小休止をしてまた歩き出す。ポセットとの距離がどれくらいあるのか判らないが、クラスキーノという所に着いた。

ここにも先に来た部隊がおり、幕舎住まいであった。我々は天幕等はなかった。これが戦闘部隊で終戦を迎え、着の身着のままの部隊の哀れさだろう。天幕のかわりに草葦の屋根を作り、三、四人一組で仮の宿

舎を作った。金蒼の収容所を九月十五日頃に出発し、クラスキーノに着いたのが二十日か、二十一日頃だったと思う。クラスキーノで列車を待ち、順番がくれば乗車しウラジオストック経由でダモイだ、といつものようにソ連軍は言っているが、少し怪しいなあとも思うようになった。

九月二十三日頃に列車に急遽乗ることになり、我々五十四作業大隊は一路ウラジオストックへと向かう筈であった。皆笑顔で今までの苦労を忘れ喜んだものだったが、私はどうしても下痢が止まらず、みんなに迷惑をかけるのは十分判っていたが、戦友達と別れるのが辛くいやなので、衛生兵の人にも病状を話さなかったのである。列車は動き出した。しかしながら東へとは行かず、どうも西へ向かっているようだった。

私はその頃列車の中でも便がしたくなり、便器がないので戸を開けてはしたのでみんなには迷惑をかけ通しであったが、一言も愚痴を言われず、本当に今でも感謝にたえない気持ちである。列車は依然として、西に向かっていた。二日、三日と経過して、とある大きい街に着いた。ハバロフスク市である。もうダモイは断念しなければならないのだろうかと皆思った。

ハバロフスクの駅内で他の路線を経由してシベリアに入った大隊がおり、戦友の一人が「どこから来た」と聞かれ、「牡丹江にいて綏芬河経由で来た」と答えた。その後この大隊はどこに行ったのか判らない。我々と同じくダモイを信じて列車に乗ったのであろうか。

私は少しの間列車の中で休んでいたが、その時、私と同じ病状のアメーバ赤痢患者は私も含めとうとう同じ連結の空の貨車に集められ隔離されてしまった。人数は十五人程度の患者だった。私と同年齢くらいの者が多くいた。列車は動き出した。西か東かと思っていたら、どうも北の方向に向きを変えて進んでいるようであった。

汚い話だが、貨車の中に入ったが便器は今までと同じで無い。便がしたくなり、二、三人が並んで片隅ですます。多分貨車の中は悪臭で鼻もちならなかったと思うが、案外患者は何ともなく、ただ横になっている

だけだった。列車は大分北に進んだのだろう、夜は寒くて汚い者同志が肩を寄せ合って休んだ。

ハバロフスクを出発して二日程経過した頃、また大きい街に着いた。何という街かその当時は判らなかったが、後にこの街が新興都市のコムソモリスク市であることが判った。北緯五十度線上にある都市である。ここで下車するのかと思っていたらまた動き出し、アムール川（黒龍江）の港に着いた。私達は、貨車込めのままにフェリーに乗った時にはいよいよダモイだと思って喜んだものだった。冷静に考えたらフェリーが日本まで行くものではないのだが、その時はダモイ船だと思い込んでいた。騙されながらもまだ心の隅ではダモイを信じていたのだろう。どのくらいフェリーに乗っていたか時間は記憶にない。フェリーが着いた所が、ムリー地区の起点地でピワニーという小さな河港の町であった。

貨車が次から次へと降ろされ、また連結された。その時私達患者の貨車の前にソ連軍人がやってきて、「ダバイダバイ」と言って下車せよと指示したので、十五人の患者は何事かと驚いたが、すぐに整列させられ先導者にフラフラしながらついて行くより仕方がなく、これでいよいよ戦友達とも別れる時がきたかと、何か淋しいような哀しいような気持ちになりながら私達はついて行った。どこに連れられて行くのかと不安であったが、運よく小さな病院ではあるが入院させてもらったのである。時に二十年九月二十八日であったと記憶している。入院の手続き、一応の身体検査が終わり、それぞれ病室に入った。入院しても薬等はなく、ただ休むだけの毎日だった。が、結構体力も回復し、冗談も言えるようになり、また別れた戦友達を思い、もう内地に帰り米の御飯、味噌汁を食べ、ボタ餅も食べていることだろうと皆で話し合っていた。

そうこうするうちに寒くなって来た。雪も降り積もり、いつしか銀世界になった。大分私の故郷四国とは違うなあと思った。十月十八日の朝が来た。ソ連はどこかに移動する場合、前もって通達することはほとんどないと言ってもよい。私達にも朝になって突然、これから名前を呼ばれた者は服を着替え、整列せよとの

ことだった。十人程の元気になった患者に私も含まれており、警戒兵の引率で寒い雪の降る道を歩きながらピワニー駅から列車に乗った。列車はピワニーとソフガワニ間を運行する旅客列車であった。私達十人は一時間程してポーニーという小さな駅に着いた。下車すると早速徒歩で雪の降る鉄道線路上を進んだ。歩くこと四十分くらいだったろうか、目的地の通称ポーニー病院、正式名称は第一四四九特別陸軍野戦病院という病院に転入院の手続きをして、第三病棟に私達は転入院した。入院して一番に驚いたのは、ピワニーの駅で別れ既に内地にダモイしているものとばかり思っていた戦友の中の一人が、収容所に着くとすぐ身体検査がありこの病院に直接入院していたのである。戦友と色々と話をしたが、ダモイどころではなく、元気な者はみんな鉄道線路工事や伐採等に従事中であるとのことだった。私もこれでダモイは断念せざるを得なくなったことを痛感した。

私の入院した第三病棟は、当時色々な病状の患者が百人くらい入っていた。鉄製の二段ベッドの上と下で四人が寝ていた。馴れるまでは窮屈で仕方がなかった。病院と言っても医療器具は勿論、薬とて一つもない、ただ名のみの病院で、体を休めるだけだった。当時のソ連は極端な物資不足だったのである。私もただ体を休めるだけだったが、幸い私の場合体力が大分回復し、自分のことは何でもできるようになっていた。十月いっぱいくらいは案外死亡者も少なく、一人か二人くらいだった。十一月に入り急に寒くなってくると死亡者が少しずつ増えてきた。そうしている間に入院患者も増える一方で、どうしてもベッド数が足りなくなり、病院側も困って分院を設置することになり、本院から東へ約八キロメートル程離れたクンという所に十一月半ば頃開設開院し、分院ができた。十一月十七日か十八日頃に本院にいた大半の患者は転院した。私も当然元気になったので分院に行くことになっていたが、どうしたことか十五日の夕方から頭が痛くなり、看護婦が驚き熱を計ってくれたら何と三十九度五分もあった。これで分院行きは中止になり、他の重症患者十人程と残留となった。昨日まで寝る所もないくらい

患者でいっぱいだった病室もがら空き状態となり、少し淋しいくらいになった。十八日頃になり漸く熱も下がり、食事もできるようになり安心した。一時は急性肺炎かと心配したが、そうではなくただの発熱だった。それから一週間も経過しないうちにまた病室は満員となった。私は相変わらず休むだけで毎日退屈しながら過ごしていたが、十二月に入り外はいよいよ厳しい寒さが続いていた。

この頃に突然病院側から「第三病棟で患者の食事の配膳、ストーブ用の薪作り、また薪用の木の伐採運搬を五人程でやってくれないか」との相談があった。元気で気の合った者五人がすぐに退院して作業につくことになった。いわゆる病棟付の作業隊である。先に述べた作業の種々は今までは伐採以外は看護婦がしていたが、患者が増えてきて対応できなくなり、私達五人が代わりにすることになった。一応作業隊長が伴さん、あとは津波さん、白石さん、渡井さんと私であった。ただもう一人安部さんという衛生兵出身の方がおられ、死体解剖時の補佐をしておられた。五人がほとんど伐採、薪作り、食事配膳をした。毎日午前中、表の小高い山へ伐採に行き、橇に積み運搬をした。衛兵所の出入りはフリーであった。作業についてはあまりきついとは思えなかったが、死者が出ると、昼夜の区別無く二時間後には必ず病院から約五百メートルくらい離れた、伐採に行く少し手前の解剖小屋に二人で担架に載せて運び、室に置く。辺りには前に亡くなった人の死体十体くらいが寝かせてある。初めの頃は気味が悪くなり置くとすぐに飛び出していたが、馴れるに従い可哀相になり、いつも室を出る時は思わず合掌した。私達はいつも心の中で思っていたのだが、いくら医学的また研究のためとは言え、この酷寒の地シベリアで亡くなった日本人捕虜を死んだ後でも利用するソ連国、ソ連人に対し憤りを感じていた。

私達は毎日同じ作業の繰り返しであった。昭和二十年も終わり二十一年の正月を迎えた。正月と言っても日本のように新年の行事も格別なく、せいぜい休むのは一日だった。日曜日で休みの時は時々、病院から二キロメートル程離れた所にドクトル、看護婦の官舎が

あり、ここの便所掃除をさせられた。凍結した糞等の除去をした。除去する時は金棒でつついて凍結した氷の糞を砕く。その時に衣服に飛び散り付着する。すぐには溶けないので気にせず部屋に入る、溶け出して悪臭が発散し、困った。

二十一年の正月も終わり、死亡する人も増えてきた。死者は解剖後は縫合し埋葬するが、埋葬は私達病院棟付の作業隊ではなく、退院した人で強制労働収容所から受領に来るまで病院全体の作業をしていた作業隊の人がしていた。冬季は零下三十度、四十度となり、つるはしや鍬の先が折れるくらい土が硬く、なかなか掘れるものではない。冬季の埋葬は大変な仕事だったので、一人一人の死体を別々に埋葬することは不可能に近かった。結局十人くらいを集めて一緒に埋めた。みんな丸裸にされていたので、誰が誰やらわからないままで可哀相でならなかった。

三ヵ月程過ぎ、そろそろダモイの話が出始めた頃、重症患者、体の弱っている人が突然ダモイだと言って出て行った。騙され通しだから、他の病院にでも行くのだろうぐらいに思い、あまり気にもしてなかった。私達のように元気な者には関係ないことのように思われたからだった。後日わかったことであるが、この人達は北朝鮮から、二十一年十二月の末から二十二年正月頃にダモイをしており、私の同年兵も二人帰国していた。

六月初め頃、突然、三病棟作業隊員の中から私と津波さんが出ることになった。いつも覚悟はしていたつもりだが、私と津波さんと聞き、内心驚いた。六人の中では私と津波さんが一番長い間いたのでこのようになったのだろう。病院全体の作業をする隊員と私達合わせて三十人程が退院することになった。翌日早速警戒兵が連れに来た。残る人、ドクトル、看護婦さん達に今まで八ヵ月間もお世話になったことを感謝し去ったのである。この後幾多の地獄の強制労働が待っていることなど、神ならぬ身では知る由もなかった。なお、この第一四四九陸軍野戦病院（ポーニー病院本院）の埋葬地には、現在も日本人の戦友達約三百人程が凍土の下で眠り続けておられることを参考までに付

記しておく。

病院から徒歩で一時間半くらいの所に小さい収容所があった。人員は二百人余りで、作業の種類は鉄道線路工事が主だった。当初は病院を出た直後であり、体力もあり、よく頑張ったので「ハラショウラボータ一」になって食物の量が増やされた。そのうちに体力も弱り、きつい作業と思うようになり、八月頃に栄養失調になって働くことができなくなり、検査の結果オーカの収容所に行くことになり津波さんとも別れることになった。この収容所には長くはいられなかった。九月頃に検査があり、今度はポーニー駅の前に所在する第四十三収容所に移された。この収容所も鉄道線路工事が主で、建築作業も少しはあった。線路工事作業では枕木の取り替え、たまにはレールの取り替えもした。枕木の取り替えの時は、バラスを掘り除き新しい枕木を敷き替える。これがなかなか大変で、敷き終わると動かぬようにと釘を打ち込む、これがまた大変であった。無理もない、食べ物が飯盒の蓋に一杯の雑炊と塩汁では労働作業はできるものではなかった。昼食用の黒パン三百グラムは朝食の時に一緒に出るのだが、昼食まで辛抱している者はほとんどおらず、朝食に一緒に食べていた。ただ救いは冬季ではなく夏季だったことである。冬季であればまだまだ大変だったと思うのである。一番困ったのは、夜中だろうが休日だろうがおかまいなしで貨車に積んだバラス等を一定時間内に降ろさなければならないことだった。体力の消耗した者には本当にひどくこたえたものだった。夜中のバラス降ろしが終わり、帰って一眠りもしないうちに起こされ、今度は昼間の鉄道作業に出される。牛馬にも劣る哀しい捕虜の厳しさをいやという程味わった。

昭和二十二年正月が明け、間もなくしてまた検査がありオーカの収容所に行くことになった。そこで偶然同年兵の江原君と出合い、二年ぶりの再会を喜んだ。三月頃に検査があり、強制労働収容所に行くことになり、人員は三十人程だった。着いた所はシェリヒノという所で第一一七収容所と言った。ここには約三百人がいた。作業の種類は以前いた四十三収容所とほとん

ど変わらなかった。鉄道工事以外に、伐採した後、土中の木の根を掘り起こす作業等であった。私は木の根掘り作業の方に従事した。掘る時は一組で一日何株掘れとノルマがあった。体力がないのでみんな大変に苦労をした。この収容所も夜中のバラス降ろしが時々あった。苦しさは先に述べた四十三収容所と同じだった。四月、五月と同じ作業を繰り返すうち漸く開墾地も完成し、立派な農場ができ上がり、馬鈴薯の植え付け、野菜の種蒔き等をし終わったのが六月の初め頃だった。

ちょうどその頃であったが、以前に赤十字社発行の葉書を書き、単なる子供だましと考えたが私も二回出した。その後すっかり忘れていたある日曜日、大隊長が内地から返信の葉書が届いたので全員集合と大声で言われた。みんな期待をしながら眼を輝かして集まった。

大隊長は、本人の承諾を得て葉書の文面を四通ばかり読み上げた。東京の現状や家族の様子、フィリピンから復員された○○さん、南方や中国方面から復員船が入港しているなどを、直接関係ないようなものの、遠く離れた母国の香りを肌で感じ、今度はシベリアの番だと、そのつもりでみんなの笑顔に活気が見られた。

自分が復員してみると、私の出した二通の葉書は無事届けられていたが、私に返信が届かなかったのは、あの当時、収容所を短期間に転々と移動したからだと思う。

興奮さめやらぬ六月十四日、ダモイの知らせがあった。私の名前がどうぞ載っておりますようにと、拝むような気持ちであった。順々に見ていくうちに私の名前を見つけた。うれしかった、本当に嬉しかった。ダモイの該当者は全部で二十人であった。でも一つ心残りだったのは、毎日私と起居をともにしていた九州豊前市の戦友の名がなかったことだ。理由は満州での前歴が「警察官」であったからだと誰かが言っていた。

翌日、今までいたシェリヒノの収容所からあまり遠くないエリジガンの中間集結地収容所へと元気な足どりで向かった。門の前では所長はじめ幹部の人達が出

迎えてくれた。その時である。よく見ると、所長と並んで立っている一人の女性はまぎれもない看護婦のクラワーだった。瞬時にしてポーニー病院にいた頃被服係でいろいろお世話になったことが思い出され、まさに奇遇の感がした。彼女もすぐに見つけ「おー深井（旧姓）」と懐かしげに声をかけてくれた。一年ぶりの再会で、青春の血が少し燃えかかったような感じであった。

その翌日、所長が直接通訳を連れて来て「私の当番をしてくれないか」と言われた。当番と言っても軽作業で、炊事用の薪作りが主で、三日に一回くらい風呂用の薪を採りに行く程度であると聞き、喜んで所長の家に行くことにした。行って見るとクラワーがおり「ダモイ、ハラショウ」と言って喜んでくれた。

二十日程して所長から「これからポーニー病院の前にあるマガジン（配給所）へ行ってタバコを買って来てくれないか」と頼まれた。私はポーニー病院と聞いた瞬間、いいチャンスなので病院に立ち寄って少しの間戦友達と話がしたいので、その旨お願いしたら気持ちよく許可してくれ、許可証まで持たせてくれた。

まずタバコを買うと、懐かしい病院へ行き一年ぶりに戦友の伴、白石、渡井、安部さん達と再会し、ドクトル、看護婦も交えて歓談して「ダモイ、オーチンハラショウ」の連発で喜んでくれた。昼食をご馳走になった上、箱入りのタバコをお土産にくれたりしてすごく嬉しかった。

いよいよダモイ列車に乗る日がやって来た。他の地区から乗って来た戦友達と合わせると千人くらいはいたような気がする。乗り込むと、頭の中はダモイのことでいっぱいで、途中通過したコムソモリスク市やハバロフスク市の大きい街の駅等をいつ通過したのか全然記憶にないのが不思議である。

七月十五日頃だったと思うが、待望のナホトカに夕方着いた。海を見てダモイ間違いなしと確信していたが、下車し整列してダモイ収容所にそのまま全員入るものと思っていたら、前半は収容所に向かったが、後半にいた私達は回れ右をさせられ、逆の方向に三十分ばかり歩かされて別の収容所に入れられた。そこで幹

部三人から「貴方達は作業交替要員として来たのです。これから三ヵ月間辛抱してほしい」と言われた。この時の精神的ショックは、筆舌には尽くし難い。

翌日からの作業は、大工、左官の手伝い、トラックから降ろされた土やバラスをならすのが主であった。私達は港でバラスをならす方に回り、三日に一回の割合でダモイ船が入港して来て、眼の前であとから来た戦友達が手を振って喜び勇んで乗船、その姿を見送るのが何よりも辛く、嫌気がさし、複雑な気持ちになった。

指折り数えた三ヵ月、今日こそはダモイ確定の朗報をと、みんな心待ちにしていたところ、今度はダモイ収容所の近くにある一戸建の新築に五十人くらいが収容された。分所ということで居心地は上々であったが、ソ連の騙し上手なのにはあきれた。

作業は、堅い岩石に穴をあけ、発破を仕掛けては奥へ進んでいく。横と高さは各二メートル、奥行き十五メートルの大きなものであった。二人一組で穴を掘る、六人で三ヵ所掘った。発破が終わると砕石されたのを片付け、また金棒で深さ一メートルくらいの穴を掘る、これの繰り返しで、なかなか根気の要る作業だった。

十二月下旬のある日、突然私を含めた二十人の者にダモイの通達があり、びっくりした。早速残留組と防寒靴、衣服などを取り替えて、互いに握手を交わし出発した矢先、ソ連の幹部がジープで乗りつけ「全員引き返せ！」と。このように騙されること三回、新年には家族団欒で正月の餅が食べられると楽しみにしていたのに、また黒パンかと大きな溜息をついた。

今考えて見ると、我々はダモイ組の補欠要員として、度外視されていたようだ。ナホトカの港は十二月を過ぎると入り海は確かに凍結するが薄い外洋はいつも白波が立っていた。ソ連側は港が凍結するので冬期間のダモイ輸送はできないと日本政府に伝えていたようだが、砕氷船でなくても、普通の船で充分砕氷されたと私は思うのである。要するにソ連は、一人でも多く、一日でも長く日本人捕虜を利用したかったのが本意であったように思われる。陽春の季節になるまでは

迎えの船は姿を見せないのだ。私達はその期間中も休むことなく岩石の穴掘り作業をしていた。

二十三年の正月も終わり、急に街の製材工場に移ることになった。作業は、大きな丸太をトロッコに積み、帯の鋸のある台まで運ぶ、またオガクズの除去などで、昼間と前夜半、後夜半の三交替制であったが、食料不足と寒さのためにかなり体力を消耗した。

四月になってダモイ組に選ばれ「すぐに出発だ」との伝達があり、飯盒一つの身軽さで、苦しい労働をともにして来た小野、橋爪、榎本、春日、八尋さん達とダモイ前の洗脳教育を受けるために第一、第二、第三収容所へと移動した。当時、民主運動なるものが盛んに行われていた頃で、労働歌を朝昼夕と歌わされ、「天皇制打倒」とか「天皇島へ上陸」、帰国したら「全員入党せよ」とか、みかけは赤い「リンゴ族」の典型的なタイプの指導者達が声をからして言っていた。またある時は一人一人を壇上に立たせ、大勢が取り巻き「お前は軍隊時代どんなことをしていたか、反省点を述べてみよ、まだあるだろう?」と執拗に食い下がり苦しめる人民裁判の恐ろしさを見たが、うっかり自己批判するとダモイに関係するので口にしなかった。

五月四日、今年最初の迎えの船に乗るのだ。二千人が整列し、三、四人の指導者から激励を受け、順次港まで足どりも軽く歩いて行った。今まで数多くダモイ船の出発を見て来たが、今日は夢にまで見た乗船ができるのだと。

船には日の丸がはためき、船体には大きく「明優丸」と書いてあった。一人ずつ名前を呼ばれてタラップを踏んで上る時の気持ちは、万感胸に迫り嬉しさでいっぱいだった。三日目、夢にまで見た祖国日本の松の緑が見えて来た。五月六日朝であった。舞鶴の桟橋には日の丸の旗を振りながら「ご苦労様でした」と大勢の方から連呼で出迎えをいただき、感激ひとしおであった。

宿舎でゆったり湯につかり垢を落として、新しい下着、衣服をもらって、三年ぶりに頂いた味噌汁、漬物、ごはんの味は今でも忘れられない。復員手続きや、日本各地の被害状況などを見聞きしたり物価の状

況などを知り、浦島太郎のような驚きであった。

五月十日、それぞれ故郷へ向けて出発して行く六人組の戦友達と、再会を約しながら堅い握手を交わして別れた。私は四国出身者と一緒に列車に乗り大洲へと向かった。途中松山で下車して、愛媛新聞社主催の座談会に出席して、シベリア生活・抑留の思い出を話し合った。

懐かしい故郷大洲へは午後三時頃着いた。次兄が駅まで迎えに来てくれて、あれこれ話をしながら我が家に漸く辿り着いた。両親の喜びの笑顔、元気な姿を見て、夢を見ているような感じがした。

その夜は家族、親戚みんなが集まり歓迎会をしてくれ、飲みながら話すうちに故郷に帰ったという実感が湧いてきた。

最後になるが、私が苦労しながらも元気で故郷へ帰って来られたのは、戦闘中に戦死された方、自決された方、シベリアの酷寒の地で過酷な労働を強いられ、その犠牲になって遂に帰国ができなかった方、その御霊の御加護があったからであり、心からご冥福をお祈り致しますとともに、政府並びに関係者のご努力で一日も早いご遺骨の収集送還を切望するものであります。

合掌

【執筆者の紹介】

生年月日　大正十三年八月十八日
昭和十四年四月　大阪市の民間会社に入社
昭和十九年三月　右会社を退社
昭和二十年二月　重砲兵第三連隊（満州第一二一五部隊）に現役入隊
八月　琿春西方、密江峠にて終戦
九月　入ソ。ムーリー地区
二十三年五月　明優丸にて復員

戦後は大洲市農協に永年勤続し、参事まで昇進。後輩の面倒をよく見、組合長をよく補佐し、組合運営に多大の功労あり。定年後は仕事が好きで、愛媛県立蚕業試験場、株式会社四国電気工事に勤務し、平成十年七月まで働く。真面目一徹、仕事の鬼であった。現在は町内会の組長のかたわら、読書、将棋、ビデオカメ

ラ撮影などの趣味と、重砲兵第三連隊の戦友会の世話をしておられる。関東軍の戦史に詳しい。

（愛媛県　山本　繁夫）

東京ダモイへの道は遠かった

愛媛県　東　兼隆

私達は、昭和二十年十月、牡丹江から貨車でイルクーツク州タイセット地区へ抑留されました。バイカル湖の北側を通るバーム鉄道の建設が私達の主な抑留の目的で、それまではソ連の囚人とドイツ軍の捕虜等でシベリア鉄道本線のタイセット駅から六十八キロまでがどうにか通過できるまでになっていました。

私達日本人の抑留者は、残り約二百三十キロをドイツ軍と交替して建設することになりました。六十八キロから先は人跡未踏のタイガ地帯が多く、鉄道建設の土工作業はとても重労働で、寒さとともに食糧不足、量も少なくさらに雑穀の質も悪いので消化不良の原因となり、栄養失調の患者が続出し、特に兵卒は食糧の分配にしても割の悪い日が続き、年老いた兵卒に犠牲者が多かったように思います。

鉄道の建設が進むに従って奥地へ奥地へと、ブラーツク方面に向けて移動しました。

昭和二十三年雪解けも近い四月頃になったある日、収容所長から東京ダモイの通達が通訳を通じてありました。これまで幾度となく騙されてきたので、またかと、すぐには信じられませんでした。が、しばらくして今度こそ本当らしく、まわりの者はいなくなっていました。私達も早速仕事場を片付け、僅かに残っている身の回りの物をまとめて収容所内の広場へ集合しました。これまで何度も仲間達を見送りましたが、今度はいよいよ自分達の番となり帰国できるとなると、何だか夢のような気持ちでいっぱいでした。

ただし収容所では一人だけ残留した者がおりました。彼の前歴の詳しいことは不明ですが、噂によると、ある収容所では偉い身分だったとかで、日頃から特務機関か憲兵か特高警察または官憲か、いずれにせ